日本死の臨床研究会東北支部

発行責任者：木村　祐輔
発 行 所：日本死の臨床研究会東北支部

Newsletter No.17

事務局：岩手医科大学緩和医療学科内
〒028-3695 岩手県紫波郡矢巾町医大通二丁目1番1号
メールアドレス：shinorinsyo.tohoku@gmail.com
ホームページ：https://sites.google.com/site/shinorinsyotohoku/

巻頭言

岩手医科大学　木村祐輔

秋冷が爽やかに感じられる季節となりました。新型コロナウイルス感染陽性者数も連日減少との報道が続いており、もちろん油断はできませんが少しホッとする心持ちでもあります。東北支部の皆々様におかれましては、いかがお過ごしでしょうか。

さて、オリンピック・パラリンピックも閉幕して早くも一月が経ちました。開催の是非について議論百出でありましたし、皆様もそれぞれにお考えをお持ちのことと思いますが、オリンピアン、パラリンピアンの活躍に純粋に心を揺さぶられた方も大勢いらしたのではないでしょうか。斯くいう私もその一人であり、特に、パラリンピアンの方々の競技に向かう姿には本当に圧倒されました。四肢に重い障害を持ちながら信じられないスピードでぶつかり合うウィルチェアラグビーの選手や、卓球のボールを足で跳ね上げ、口に咥えたラケットで華麗にプレーする卓球選手、あるいは重度の脳性麻痺者でありながら精緻なボール捌きを見せるボッチャの選手の方々。挙げればキリがありませんが、どうしてそんなことができるのかと心の底から驚嘆するばかりでした。この地に到達するためには、私には到底想像もできないほどの厳しい鍛錬を積んでこられたでしょうし、なにより選手お一人お一人が、自らを強く信じ続けた結果なのだろうと深く感じ入った次第です。コロナ禍に喘ぐ苦しい日々ではありますが、大きな勇気を頂いた２ヶ月でした。

2024年のパリ大会もあっという間に訪れそうです。その時、選手の活躍にマスクを外して大声で声援を送り、皆で肩を組んで喜び合うことができる日常が戻っていることを、心から願うばかりです。

今回のニューズレターから、各施設からお寄せ頂いた紹介文と写真を掲載することといたしました。皆様と直接お会いできるようになるまでもうしばらく時間がかかろうかと思い、東北支部の連携の一助になればと企画いたしました。
今後も会員の皆様に順次ご寄稿いただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

だんだん寒さが増して参ります。皆様におかれましては呉々もご自愛専一にお願い申し上げます

東北支部緩和ケア便り

福島県
坪井病院

緩和病棟で勤務をするようになったある日、初代坪井病院院長である故坪井栄孝先生に言われた「ホスピスとはなんだかわかるかい？」と突如と質問された一言が私の本当の意味での緩和医療との出会いでした。何も答えられないでいる私に一言「しっかり勉強しなさい」と鋭く言われその場を立ち去られました。

私自身は、消化器内科として内視鏡治療に携わる中で様々な縁があり坪井病院の緩和病棟でも治療を行うようになりました。ただ緩和医療に関しては全くの初学者であり、右も左もわからない手探りで診療にあたりながら、この与えられた命題を考えさせられる日々を過ごしてきました。
そのような折に突如として世界を襲ったパンデミック。昨年の支部会は急遽中止になり2021年に行なった支部会はコロナ禍で行われた初めてのオンライン大会となりました。パンデミックが医療業界に及ぼした影響は想像を超えるものでした。緩和領域における変化もかつてないものとなりました。緩和の患者にとってコロナ感染は命に直結します。院内感染を防ぎながら、当院のホスピスが大切にしているものを守るという難しい課題が突きつけられました。

今回の支部会で流した映画「おみおくり sending off（トーマス・アッシュ監督）」の中にその課題の一つの答えがあったように思います。内容は福島県で高齢の親を在宅で看取るまでのドキュメンタリーでした。淡々と流れる日々の営みと家族の生活に派手な演出はありません。しかし、そこには確かな人と人との「ふれあい」があったと感じました。身体的なふれあいだけでなく心のふれあいが描き出されていました。

坪井病院の緩和病棟でも、コロナで失われた心のふれあいをいかにして回復するか現場で四苦八苦する毎日です。面会を最小限にしながらも患者さんと直接接触できるスタッフは自然といつも以上に微にいり細にいり患者さんとのやり取りを増やしています。

大きく時代が変わる時、変化に目が行きがちになります。しかし大きく変化する時こそ、変化しないものが大切だと思っています。変化という表層の下に隠れた変化しないものを見極めることが初学者である私が目を向けることだと感じています。そこにいつの時代も変わらない本質があるからです。冒頭に述べた先代の坪井栄孝先生の問いはまだでていません。しかし、支部会での映画とコロナがその朧げな輪郭を教えてくれたように思えます。

坪井病院　岡田勝治

福島県

小川医院

2021年5月の日本死の臨床研究会東北支部会では、当院の訪問診療ドキュメント映画「おみおくり」を上映していただきありがとうございました。この映画を観ていただいた方々から嬉しいコメントをたくさん頂戴し、これからの診療の励みとなりました。

当院は福島県会津地方の猪苗代町という人口13,000人足らずの小さい町にあり、私が担当している一般内科外来の他に整形外科と眼科があります。平成23年の東日本大震災発生時には浪江町と双葉町の方々が避難して来られて普段の外来診療の倍の人数の約200人/日を診療しました。もともと15床あった入院ベッドも全て返却し、その後は無床診療所として訪問診療に力を注いできました。

訪問診療では、施設での看取りも含めて年間約40人の方を見送っています。しかし、非常に残念なことに今年の8月から訪問看護ステーションの看護師規定数を維持することが出来なくなり、今は診療所という形で看護師を派遣し訪問診療を続けております。どんな状態の患者さんもできる限り対応して、最期まで満足していただける事を目標に診療しております。

「コロナ禍であるために自宅で最期を・・・」というがん終末期の方が増えてきているため、疼痛緩和や精神的な対応がより大変になってきておりますが、在宅で少しでも良い人間関係を構築した看取りをしていきたいと思っております。ご紹介いただく総合病院の先生方には自宅退院のタイミングをなるべく意思疎通のできるうちにしていただけると幸いです。

福島県猪苗代町　在宅支援診療所　小川医院　　内科医　今田 かおる

秋田県

市立秋田総合病院

市立秋田総合病院は診療科27、病床数456（結核病床、精神病床を含む）の急性期病院です。当院で緩和ケアチームが活動を始めたのは2006年からでした。当時から多職種でのチーム活動を大切にしており、現在は緩和医療認定医を中心に身体症状担当医師3名、精神症状担当医師1名、歯科医師1名、薬剤師1名、管理栄養士1名、理学療法士1名、MSW1名、臨床心理士1名、事務2名、看護師4名でチーム活動を行っています。

当院は来年秋に新病院がオープンします。現在はそのための様々な準備に追われる日々ですが、新病院の目玉の一つとして、緩和ケア病棟（15床）の新設があります。開設後は秋田県内で3つ目の緩和ケア病棟を有する施設（秋田市内では２つ目）となります。

みなさんご存知の通り、秋田県はがんによる死亡率が日本全国1位の県であり、高齢化率も日本全国1位です。今後ますますホスピス・緩和ケア病棟の必要性が高まることは必至で、そうした中で少しでも緩和医療に貢献できることを目指し準備を進めています。

今一番の楽しみは、緩和ケア病棟に設置するソファーや椅子、テーブルなどの家具選びです。壁の色や床の色・・などと夢は大きく膨らむ一方で予算という高い壁はありますが、少しでも病院特有の無機質な感じを和らげ、患者さんとご家族が安らげる環境を作り上げることができれば・・と思っています。

岩手県

岩手県立胆沢病院

　こんにちは。岩手県立胆沢病院の管理栄養士の蛇口です。
今回は当院の緩和ケアチームを紹介する機会を頂きありがとうございます。当チームは消化器内科　小野寺美緒先生、緩和ケア認定看護師　及川麻希さんを中心に病棟看護師、薬剤師、MSW、管理栄養士等で毎週水曜日1時間程度かけて1~2名の患者さんの回診をしています。依頼は症状コントロールや気持ちのケアが主な内容ですが、小野寺先生が食事の希望も聞いてくれます。

　ある消化管がんの患者さんは、狭窄がありステントを挿入していましたが、「唐揚げが大好きだがもう食べられない」と話されました。よく噛んで少量ずつ食べることや肉の筋繊維を柔らかくすることで唐揚げを楽しみました。しかし、「先を考えるとつらい。死を待つことに何の意味があるのか。」というお気持ちを抱えていました。窓の外を見て「桜が咲いた。」と話したのでチームで院内の桜を見に行きました。抜けるような水色の空とピンクの桜の下、皆で記念撮影をしました。写真をプレゼントすると「コロナで兄弟と面会が出来ないが、つらいと嘆いたのではなく病院の皆さんとこんなに楽しい時間を過ごしていたと写真から伝わりますかね。つらいばかりだったと思われたくない。今まで迷惑ばかりかけてきたので最期くらい安心させてやりたい。」と嬉しそうにし、お家に帰られるまで枕元に飾っていてくれました。

　小さいことしかできませんが、目の前のお一人お一人の生きがいや喜びを支えられるチームでありたいと思いながら日々活動しています。

山形県

三友堂病院

三友堂病院は1886年に山形県米沢市に開院した135年の歴史を持つ病院です。当院は2005年に県内2番目となる緩和ケア病棟を開設し、通院・入院・在宅での緩和医療を実践して今年で17年目を迎えました。2009年には地域緩和ケアサポートセンターを開設して、地域緩和ケア連携“愛のネットワーク”の拠点として、地域の医療・介護・福祉従事者との間で連携・交流・情報交換・教育・研修を図り、また緩和ケア教室・出張講座・がん相談窓口を通じて地域住民への啓発を継続して行っています。

当緩和ケア科には、医師3名（心療内科医を含む）、看護師16名（がん専門相談員を含む）、臨床心理士、音楽療法士、リンパケアセラピスト、MSWが常駐しており、これらに薬剤師、管理栄養士、理学・作業療法士、言語聴覚士、臨床仏教師が加わり、チームとして症状緩和・意思決定支援（人生会議）・在宅療養支援を展開しています。さらに医師と看護師は、地域スタッフと連携しながら、在宅医療の実地で患者を支えます。この度、地域の医療・介護・福祉スタッフのための「地域緩和ケアハンドブック―緩和ケアマニュアル―『地域で支える』を改訂し、第二版を出版いたしました。是非、ご一読いただけましたら幸いです（発注を希望なさる方は当院地域緩和ケアサポートセンターまでご一報ください）。

2023年には米沢市立病院と当院の官民が強力に連携した山形県置賜地域の急性期から在宅医療までを担う中核病院が新築開院されることになっております。当院はこの紹介を含めて、2022年5月28日に本研究会東北支部総会山形大会を前回（2015年）に続いて、米沢市を会場に開催いたしますので、是非、ご参加くださいますよう、お願いいたします。
私たちは、今後も地域の人々がその人らしい人生の締めくくりを実現できるよう、支えるために活動してまいります。

青森県

ときわ会病院

ときわ会病院は青森県津軽地方のほぼ中央に位置する藤崎町にあります。田んぼとリンゴ畑に囲まれながら、津軽地方の各総合病院から比較的アクセスしやすい環境です。内科・外科などを中心として総入院病床数149床のうち、24床が緩和ケア病棟です。

緩和ケア病棟は2007年12月から稼働し、20床が個室、4床が2床室です。全室に洗面所・トイレ・インターネット接続回線（有線LAN）が設置されており、有料個室は3000円/日が浴室付き、5000円/日が浴室・キッチン付きとなっています。殆どの部屋からは、臥床したまま岩木山を眺めることが出来ます。

緩和ケア科としては医師3名、緩和ケア認定看護師2名、医療ソーシャルワーカー1名、病棟看護師、介護福祉士、薬剤師、リハビリなど大勢のスタッフが業務に携わり、「緩和ケア外来」「訪問診療」「入院」の3本柱で運営しています。この3本柱が密接に連携しているため、入院と在宅の移行が比較的スムーズであると感じています。

今回のコロナ禍では、当院でも非常に大きな影響を受けており、最たるものがやはり面会制限です。本来ならご本人・ご家族とスタッフで話す津軽弁が穏やかに飛び交うのですが、それが少ない日々が続いています。誰も予想しなかった事態ではありますが、頑張って津軽弁を広めてくれている「りんご娘の王林ちゃん」のように、自然でありのままの努力を、みんなで重ねて行きたいと思います。

2020年度活動報告と決算報告

◆2020年度活動報告

年	月　日	内　容	場　所
2020年	10月30日	東北支部世話人会	オンライン開催
	12月15日	ニュースレターNo.１６発行	

◆2020年度決算報告

収入の部			支出の部		
	前年度繰越金	821,035円		通信費	32,582円
	入会金（1,000円×1名）	1,000円		印刷費	0円
	年会費（1,000円×150名）	150,000円		支部機関紙発行費（年1回）	22,440円
	支部活動援助金	0円		支部会開催費用	0円
	その他（利息預金）	8円		一般事務消耗品費	0円
	収入合計	972,043円		次年度繰越金	917,021
				支出合計	972,043円
				残額	0円

日本死の臨床研究会東北支部　世話人

●支部長　○監事

青森県

馬場　祥子　医療法人ときわ会ときわ会病院
小枝　淳一　社団法人慈恵会青森慈恵会病院
蛯名　正子　医療法人ときわ会ときわ会病院
太田　　緑　みどりの風訪問看護ステーション

秋田県

○ 丹羽　　誠　市立横手病院
嘉藤　　茂　外旭川病院ホスピス
松尾　直樹　外旭川病院ホスピス
石川　千夏　市立秋田総合病院

岩手県

● 木村　祐輔　岩手医科大学緩和医療学科
望月　　泉　八幡平市国民健康保険西根病院
長澤　昌子　岩手医科大学高度看護研修センター
星野　　彰　岩手県立中部病院
蛇口　真理子　岩手県立胆沢病院

山形県

大石　玲児　三友堂病院
斎藤　綾子　寒河江市立病院
酒井　道子　山形のターミナルケアを考える会事務局
戸田　智子　訪問看護ステーションきらり
神谷　浩平　山形県立中央病院

宮城県

亀岡　祐一　光が丘スペルマン病院
牛坂　朋美　光ヶ丘スペルマン病院
中保　利通　宮城県立がんセンター
高橋　通規　国立病院機構仙台医療センター

福島県

今田　かおる　医療法人 社団 敬天会 小川医院
○ 清水　千世　一般財団法人慈山会医学研究所付属坪井病院

年会費について

2019・2020年度の会費を納入頂きましてありがとうございました。未納の方は東北支部事務局口座に直接お振込みをお願い致します。（本年度より口座を岩手銀行に変更致しました）

口座名義：日本死の臨床研究会東北支部
岩手銀行 矢巾支店　普通　2158984

日本死の臨床研究会　東北支部事務局

〒028-3695 岩手県紫波郡矢巾町医大通二丁目1番1号
岩手医科大学　緩和医療学科　木村（事務担当・川村）
電話 019-613-7111　FAX 019-907-8468
E-mail shinorinsyo.tohoku@gmail.com